

市場価値論における「異常な組み合わせ」

東 井 正 美

I 問題の所在

「競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」と題する『資本論』第3巻第10章¹⁾は、マルクスの草稿が未完成なものであったせいか、極めて難解な章として知られている。そしてその章のなかに「不明瞭な箇所」とか「曖昧な箇所」とか呼ばれる市場価値規定に関する叙述がある。例にならって、「不明瞭な箇所」を挙げれば、以下の通りである。

〔I〕「ただ異常な組み合わせのもとでのみ、最悪の諸条件または最良の諸条件のもとで生産される諸商品が市場価値を規制するのであって、市場価値はそれ自体市場価格の変動の中心をなす。」(KⅢ880)

〔II〕「これに反して、需要が非常に強くて、最悪の諸条件のもとで生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないならば、このよ

1) 10. Kapitel · Ausgleichung der allgemeinen Profitrate durch die Konkurrenz. Marktpreise und Marktwerte. Surplusprofit. Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 25, Das Kapital, Kritik der Politischen ökonomie, Buch III, Dietz Verlag, Berlin 1975, SS. 182-209.

訳本には、長谷部文雄訳本(青木書店版)、向坂逸郎訳本(岩波書店版)、岡崎次郎訳本(大月書店版)、宮川実訳本(あゆみ出版)がある。本稿では、宮川実訳本を使用するが、その他の訳本も参考にした。引用箇所は原書ページを(KⅢ 182-209)で示す。訳本には原書のページが付されてある。宮川実訳本では「本文下の欄外に付した丸括弧()でくくった洋数字は、原書のページをしめしている」。岡崎次郎訳本では、「本文上欄の丸括弧内のアラビア数字は本全集ドイツ語版のページを示す」。したがって、原書のページで訳文の引用箇所があきらかになる。

うな諸商品が市場価値を規定する。このようなことが可能なのは、ただ、需要が普通の需要を越える場合か、または供給が普通の供給よりも減る場合だけである。」(KⅢ188)

〔Ⅲ〕「需要が供給に比べて弱ければ、有利に生産される部分が、その多少にかかわらず、その価格をその個別的価値まで引き下げることによって、強引に市場に割り込んでくる。最良の諸条件のもとで生産される諸商品のこの個別的価値と市場価値と一致することは、供給が需要を非常に大きく越える場合のほかには、ありえない。」(KⅢ194)

〔Ⅳ〕「これに反して、商品分量がそれにたいする需要よりも大きいかあるいは小さい場合には、市場価値からの市場価格の背離が生じる。そして、第1の背離は、もし商品量が少なすぎるならば、つねに、最悪の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制し、もし多すぎれば、つねに、最良の諸条件のもとで生産される商品が市場価値を規制するということであり、したがって、相異なる諸条件のもとで生産される商品分量のあいだのたんなる比率からすれば別の結果が生じざるをえないにもかかわらず、両極の一方が市場価値を規定するというのである。」(KⅢ195)

以上が「不明瞭な箇所」である。マルクスは、需要供給関係が市場価格の市場価値からの背離を説明するだけだとしながらも、この箇所では一見したところ需給関係が市場価値の大きさを極めるかのように叙述している。これをどのように解明すべきなのであろうか。この解明こそが市場価値論に関して最大の難解なものとされている。

市場価値論の論議の的は、①『資本論』体系のなかの「市場価値」の位置づけ、②「不明瞭な箇所」の解明、③加重平均規定か支配的大量規定かということである。本稿では、「不明瞭な箇所」を解明するために、問題の「異常な組み合わせ」を究明することにする。なぜならば、「異常な組み合わせ」の理解が、「不明瞭な箇所」の解明の鍵であると考えられるからである。平瀬巳之吉氏も、次のように指摘されている。「いわゆる『不明瞭な箇所』の核心を『異

常な組合せ』の問題として私は理解し、かつ『異常な組合せ』とは、通常需要にたいする異常供給、もしくは通常供給にたいする異常需要の問題にほかならないと解する²⁾。本稿では、「異常な組み合わせ」の理解を課題とする。それが「不明瞭な箇所」を解明することができるからである。これがとりもなおさず、本稿の課題である。

II 市場価値の概念とその諸規定

(1) 市場価値の概念

まず確認しておくべきことは、同一生産部面においては市場価値、相異なる生産部面では生産価格ということである。

「競争が一つの部面でまず成し遂げることは、諸商品の異なる個別的諸価値から一つの同じ市場価値と市場価格とを成立させることである。しかし、相異なる諸部面の諸資本の競争がはじめて、相異なる諸部面の諸利潤率を均等化する生産価格を生み出すのである。」(K III190)

市場価値とは、同一生産部面内部で相異なる生産諸条件のもとで生産されて、個別的価値を異にする同種の諸商品が同一市場において現れるときにもたなければならない「一般的な価値」(der allgemeine Wert)、または「共通的な価値」(gemeinschaftlicher wert)のことである(T543参照)³⁾。つまり、市場価値とは、一物一価であって、同一市場での同種の諸商品の相異なる個別的価値の「共通的な価値」または「一般的な価値」である。

この市場価値は、「一面では、一つの部面で生産される諸商品の平均価値と

2) 平瀬巳之吉『「資本論」現代考』(未来社刊, 1983年) 155~6 ページ。

3) Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, Zweiter Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1967.

訳書には、時永淑訳本(大月版)がある。なお、MEGA, 第3巻「カール・マルクス経済学批判(1861~1863年草稿)」, 第3分冊, ベルリン, 1973年。——の訳本としては、時永淑・安田展敏共訳「マルクス資本論草稿集」◎がある。引用箇所(T543)は、手稿ページである。

見なされるべきであろうし、他面では、その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値とみなされるべきであろう。」(KⅢ187-8) この命題で注目されるべきことは、この文章の前半では市場価値が加重平均価値としてとらえられ、後半ではその部面で支配的少量をなす諸商品の個別的価値としてとらえられていることである。便宜上、前者の市場価値に関する規定を加重平均規定と呼び、後者のそれは支配的少量規定と呼ばれる。

なお、前段の「平均価値」の「平均」は、「算術平均」の意味に用いられ、後段の「平均的諸条件」の「平均」には、「算術平均の意味の外になお支配的少量の意味をも容れる余地を残しているのではないかと考えられる……そうなればマルクスは同じ『市場価値』という概念を二つの異った意味に用いているといわざるを得ない。」⁴⁾ マルクスが抽象的に確定した市場価値には、加重平均的価値としての市場価値と、支配的少量商品の個別的価値に規制される市場価値とがある。マルクスが市場価値の諸規定のために設けた三つの場合において、「中位的少量、上・下均衡」の「第一の場合」において、二つの市場価値は整合(または合致)しており、そこには問題がない。「下位相対的少量」という「第二の場合」と、「上位相対的少量」という「第三の場合」とのいずれにおいても、加重平均的価値＝市場価値と少量商品の個別的価値＝市場価値とは、まったく、異なったものとして現れる。その意義はともかくとして、マルクスにしたがえば、抽象的に確定される市場価値は二通りであり、一つは加重平均的価値としての市場価値であり、いま一つは支配的少量商品の個別的価値に規制される市場価値である。ここで、このことさえ確認しておけばよい。

(2) 市場価値の諸規定

1. 市場価値に関する支配的少量規定

一つの生産部面全体の生産物をなして同一市場に存在する諸商品の大量は、

4) 鈴木鴻一郎『地代論論争』(勁草書房, 1952年) 22～3 ページ。

「ほとんど標準的な社会的諸条件のもとで生産されており、その結果、この価値は、同時に、この大量を形成する個々の商品の個別的価値である、と仮定しよう。」そして、この諸条件よりも悪い諸条件で生産されている相対的に小さい一部分の個別的はこの商品の大きな部分の中位的価値よりも大きく、中位的諸条件よりもよい条件で生産されている他の一小部分の個別的価値はこの中位的価値よりも小さいが、しかし「この両極は平均されて、両極に属する諸商品の価値に等しいものとすれば、そのばあいには、市場価値は、中位の諸条件のもとで生産された諸商品の価値によって規定されている。」(K III 192)

「これとは反対に、市場に出される問題の商品の総量は同じままであるが、……悪いほうの諸条件のもとで生産される商品量が、市場価値または社会的価値を規制する。」(K III 192)

「最後に、中位よりも良い諸条件のもとで生産される商品量が、中位よりも悪い諸条件のもとで生産される商品量よりもいちじるしく多く、中位の事情のもとで生産される商品量にくらべてもいちじるしく大きいと仮定すれば、そのばあいには、最良の諸条件のもとで生産される部分が市場価値を規制する。」(K III 192)

2. 市場価値に関する加重平均規定

「実際に、まったく厳密に言えば(もちろん現実には、また近似的に、非常にさまざまに変容してのみ現れるだけであるが)、第1の場合には、中位の価値によって規制される全商品量の市場価値は、それらの個別的価値の合計に等しい。といっても、両極で生産される諸商品にとっては、この価値は、それらに押しつけられる平均価値として現れるのであるが。／第2の場合には、厳密に言えば、各個の商品の、あるいは総商品量の各可除部分の、平均価格または市場価値は、いまでは、相異なる諸条件のもとで生産される諸商品の加算によってでてくる商品量の総価値と、この総価値から個々の商品に帰属する可除部分とによって、規定されているであろう。／第3の場合のように、両極と中位との価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合に中位の価値よりも低い。

そしてそれは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くも遠くもなる。」(KⅢ193-4)

これまでに与えられた市場価値に関する諸規定では、以下のことが想定されている。すなわち、「生産される諸商品の分量は同じであり、与えられた分量であること、相異なる諸条件のもとで生産されるこの商品分量の成分の比率だけが変化するということ、したがってこの同じ商品分量の市場価値がいろいろに違って規制されるということ、……そのさい生産された商品の一部分がときに市場から引きあげられないということ」(KⅢ194-5) これである。

Ⅲ 「異常な組み合わせ」

問題の「不明瞭な箇所」の第Ⅰの箇所にある「異常な組み合わせ」(außerordentliche Kombinationen) について二つの理解の仕方がある。一つは、需給の「組み合わせ」の異常という理解であり、今一つは、生産諸条件の「組み合わせ」の異常という理解である。

(1) 生産諸条件の異常な「組み合わせ」という理解について

山本二三丸氏は、「同一商品を生産しながらそれぞれ生産諸条件を異にし、したがってそれぞれ個別的価値を異にする a, b および c が、生産総量の上でそれぞれどれだけの割合を占めるかということが、『組み合わせ』の問題であり、この『組み合わせ』いかんによって市場価値が決定されるのである。」と述べ、「異常な組み合わせ」とは、『劣悪な条件』のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第二の『組み合わせ』と『優良な条件』のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第三の『組み合わせ』をさしていったものにほかならない。⁵⁾ と述べられた。このような「組み合わせ」に関する山本教授の解釈は、いまや通説にまで高められている。

一見したところ、この理解は正しいものと思われる。なぜならば、最悪の諸

5) 山本二三丸『価値論研究』(青木書店、1962年) 135～6 ページ。

条件のもとで生産された諸商品が市場価値を規制するのは、「第二の場合」——「下位相対的大量」——の場合にしかありえないからであり、一方最良の諸条件のもとで生産される諸商品の個別的価値が市場価値を規制するのは「第三の場合」——「上位相対的大量」——でしかありえないからである。

しかしながら、マルクスは、「第二の場合」においても、「第三の場合」においても、市場価値に関する加重平均規定を与えているのである。したがって、「下位相対的大量，上中不均衡」や「上位相対的大量」という生産諸条件の「組み合わせ」が、一義的に、市場価値に関する最悪規定や最良規定に結びつかないのである。生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、「相異なる諸条件のもとで生産される商品分量のあいだの単なる比率」を変え、平均価値を変えるだけである。生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、「相異なる諸条件のもとで生産される商品諸分量のあいだのたんなる比率からすれば別の結果が生じざるをえないにもかかわらず、両極の一方が市場価値を規定するということ」(KⅢ195)を何等説明することができない。敷衍すれば、生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、平均価値の大きさを変えるだけであって、両極の一方が市場価値を規定するということを説明できない。その部面での支配的大量をなす商品の個別的価値によって市場価値が規制されるということを説明するためには、やはり、競争——市場では需要と供給——という観点を入れてこなければならぬのである。したがって、生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、単に、平均価値の大小を決めるだけとしかいいようがない。ここに、「異常な組み合わせ」を生産諸条件にかかわらせることの最大の難点がある。

とはいえ、競争は、「中位的相対的大量，上・下均衡」という「第一の場合」において、加重平均的価値としての市場価値を成立させるが、最悪または最良の諸条件のもとで生産される商品の個別的価値を市場価値として成立させることはありえないのである。なぜならば、市場価値は、加重平均的価値であるか、支配的大量商品の個別的価値であるかのいずれかであるからである。したがって、市場価値に関する最悪規定や最良規定が可能となるのは、「第二の場

合」か「第三の場合」のいずれかの場合においてである。それゆえに、「異常な組み合わせ」を生産諸条件の「異常な組み合わせ」——「第二の場合」と「第三の場合」——と理解する余地があるように思える。

しかしながら、繰り返していえば、生産諸条件の「組み合わせ」は、「この商品分量の成分間の比率」を変化させて、平均価値の大きさや大量商品の個別的価値を変化させる。生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、供給側の商品比率による単なる平均価値や大量商品の個別的価値の確定であるにすぎない。生産諸条件の「異常な組み合わせ」は、市場価値に関する最悪規定や最良規定の論拠を与えるものではない。その論拠は競争に求められなければならない。

（2）需給の「異常な組み合わせ」

「異常な組み合わせ」を需給との関連でとりあげられたのは、わが国の学界では長谷部文雄氏をもって嚆矢とする。長谷部氏は、氏の訳本『資本論』第3部第2分冊<9>（日本評論社，1969年）においてこう述べられている。

「ここでの問題は『最悪の条件下……で生産された商品が市場価値……を規制する』ところの『異常な組み合わせ』すなわち『需要が普通の程度を凌駕する場合』の説明である。」（同書，7ページ）

山本二三丸氏が指摘されているように、「訳注のこの部分は、日本評論社版訳本のみに掲げられていて、青木文庫版でははぶかれている。」⁶⁾

その後、吉村勵氏は、「この『異常な組み合わせ』とは、価値の場合に前提され当然であった供給と需要との終局的な一致の崩壊である。」⁷⁾とされた。

長谷部氏も吉村氏も、そのように指摘されてはいるものの、それをそれ以上に積極的に展開されてはいない。

「異常な組み合わせは需要と供給との不均衡を意味する」という私の初期の考え方は、次のような難点に逢着した。マルクスは、「市場価値がなんであろ

6) 山本二三丸，同書，138ページ。

7) 吉村 勵『現代の資金論』（日本評論新社，1969年）29ページ。

うと、それを取りだしてみるためには、需要と供給とが均衡していなければならないということは、平凡な経済学者でも認めざるをえないのである。」(KⅢ 202)と述べているのである。競争により市場価格が市場価値に一致した場合には、需要と供給とが一致しているのである。この難点はいかのように解決される。

マルクスは述べている。「需要と供給とが一致するのは、ある生産部門の商品分量がその市場価値どおりに、……売られるように需要と供給との関係がなっているばあいである。／商品がその市場価値で売られるばあいには、需要と供給とは一致している」(KⅢ199)と。これを「第二の場合」と「第三の場合」とで考えてみよう。競争が加重平均的価値としての市場価値を成立させるときには、需要と供給とが一致している。競争が支配的大量商品の個別的価値としての市場価値を成立させるばあいにも、やはり、需要と供給とが一致しているのである。マルクスは、需給一致を二通りの意味で使用しているのである。そこで、「本来の困難は、需要と供給との一致ということが意味していることの規定である。」(KⅢ199)といわざるをえないのである。マルクスは、加重平均的価値としての市場価値を実現させる需要と供給とを「普通の」需給の組み合わせと考えたものと思われる。マルクスは、「諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然法則である」(KⅢ197)と考えている。この考えの当然の帰結として、加重平均的価値としての市場価値を実現させている需給一致こそが、需給の「普通の」組み合わせとなるであろう。「普通の」需給関係についてのマルクスの叙述をみることにしよう。

(3) 需給の「普通の」組み合わせ

市場で加重平均的価値としての市場価値を成立させている需要と供給との関係についてのマルクスの叙述は、以下の通りである。

① 「平均価値での、すなわち両極の中間にある大量の商品の中位価値での、商品の供給が、普通の需要(die gewöhnliche Nachfrage)をみたすばあいに

は、市場価値よりも低い個別的価値をもつ諸商品は、それ自身が含まれている剰余価値の一部分を実現することができない。」(K III188)

② 「これまで与えられた市場価値に関する諸規定では、生産される諸商品の分量は同じであり、与えられた分量であること、相異なる諸条件のもとで生産されるこの商品分量の成分の比率だけが変化すること、したがってこの同じ商品分量の市場価値がいろいろに違って規制されるということ、が想定されている。この商品分量が普通の供給量(*das gewöhnliche Quantum der Zufuhr*)だと仮定しよう。そしてそのさい、生産された商品の一部分がときには市場から引きあげられることがありうるということは、度外視しよう。いまこの商品分量にたいする需要もまた普通のもの(*die gewöhnliche*)であるならば、この商品はその市場価値で売られる。さきに研究した三つの場合のどれでこの市場価値が規制されようともそうである。この商品分量は、ただある欲望をみたすだけではなく、それをその社会的範囲でみたすのである。」(K III194-5)

③ 「一定の物品の生産に費やされる社会的労働の範囲が、みたされるべき社会的欲望の範囲に合致しており、したがって生産される商品分量が不変的需要のもとでの再生産の普通の規模(*der gewöhnliche Maßstab der Reproduktion*)に合致するならば、この商品はその市場価値で売られる。諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然法則であり、これから出発して背離を説明するべきであって、逆に背離から法則そのものを説明するべきではない。」(K III197)

以上の諸章句での市場価値は、いずれも、需要が不変のもとで再生産される商品の供給量が「普通の供給量」であるか、供給量が不変のもとで、需要が「普通の需要」であるというような需給一致のもとで成立している加重平均的価値としての市場価値のことなのである。言い換えれば、需要が不変のもとで再生産される商品の供給量が「普通の供給量」であるか、再生産される商品の供給量が不変のもとで、需要が「普通の需要」である場合には、加重平均的価値としての市場価値が成立するのである。このような需要と供給の一致を、マ

ルクスは、需給の「普通の」組み合わせ(または結合)と考えたに相違ない⁸⁾。

(4) 「異常な組み合わせ」

「不明瞭な箇所」のIの箇所では、「ただ異常な組み合わせ(außerordentliche Kombinationen)のもとでのみ、最悪の諸条件または最良の諸条件のもとで生産される諸商品が市場価値を規制するのであって、云々」という文章にすぐ続けて、次の文章がくる。すなわち、「平均価値での、すなわち両極の中間にある大量の商品の中位価値での商品の供給が、普通の需要(die gewöhnliche Nachfrage)をみたすばあいには、云々」。

この文章の文脈をたどると、「異常な組み合わせ」とは、需給が普通でない状態を指していると読みとられるのである。つまり、「異常な組み合わせ」とは、需給にかかわる用語であって、需要が「普通の需要」でないか、供給が「普通の供給」でないかする場合の状態を指している。しかし、不変的需要のもとで、商品の再生産量が変わって、「普通の供給」よりも大きすぎるか、小さすぎる場合には、単なる需給の不均衡を意味するだけであって、わざわざ需給の「異常な組み合わせ」と言う必要がないのである。「第二の場合」と「第三の場合」とでのように、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値が実現し、商品が市場価値で売られるばあいには需要と供給とは一致している。このような需要と供給との一致が、加重平均的価値としての市場価値を前提とする需給の一致と区別して、「異常な組み合わせ」と名づけられたものと思われる。

8) 高島永幹氏は次のように言われている。すなわち、「需給の均衡とは、ほんらい、一定の価値を前提とし、この前提のもとにそれぞれ一定のものとして現われる需要と供給とが互いに量的に一致するということである。そしてここに前提される価値は、一般に平均価値を意味することはいうまでもなからう。需給均衡の想定のもとに平均価値として決定される市場価値は、相異なる生産諸条のもとで生産される商品の諸分量間における個別的価値の平均として定められる」(「市場価値論におけるいわゆる『不明瞭な箇所』について」、茨城大『農学術報』第8号、1960年、185ページ)。

高島氏のいわれる「需給の均衡」こそが「普通の」需給一致と考えられるのである。

もしも、*anßerordentliche Kombinationen* を、「異常な組み合わせ」と訳出されずに、「異常な結合」と訳出されていたらどうなっていたであろうか。「異常な結合」が生産諸条件の「異常な結合」とは、解いされなかったのではなからうか。「異常な結合」と訳出されていたならば、需給の「異常な結合」と解いされていたのではなからうか。

さて、つぎの二つのマルクスの叙述を比較してみよ。

「ただ異常な組み合わせのもとでのみ、最悪の諸条件または最良の諸条件のもとで生産される諸商品が市場価値を規制する。」（「不明瞭な」Iの箇所）

「最悪の諸条件のもとで生産される諸商品が市場価値を規制する……ということが可能なのは、ただ需要が普通の需要(*die gewöhnliche Nachfrage*)をこえる場合か、または、供給が普通の供給(*die gewöhnliche Zufuhr*)以下に減少するばあいだけである。」（「不明瞭な」IIの箇所）

二つの章句をくらべてみると、後者が前者を敷衍的に説明しているものと思われる。したがって、「異常な組み合わせ」は、需給の「異常な組み合わせ」と見なされるべきであろう。しかし、需給の「異常な組み合わせ」は、すでに指摘しておいたように、単なる「需要と供給との不均衡」を意味しない。第二や第三の場合のように支配的大量商品の個別的価値としての市場価値の実現を前提とする需要と供給との一致を、「異常な組み合わせ」が意味するのである。

マルクスは、「ここで抽象的に述べたこのような市場価値の確定は、現実の市場では、買い手たちのあいだの競争によって媒介される。」（傍点は原文のイタリック）と述べ、「一方の側に一つの生産部門全体の生産物がおかれ、他方の側には社会的欲望がおかれることになると、このみたされるべき欲望の分量が本質的な契機になる。」と述べてから、「この社会的欲望の程度すなわち量」の考察に入っている。(K III 194)

需要と供給とが一致すれば、同一市場にある同種の諸商品の市場価格は、市場価値と一致して、商品は、市場価値で売られる。

「中位相対的大量、上・下均衡」の「第一の場合」においては、需要と供給

とが一致すれば、諸商品の市場価格は、加重平均的価値としての市場価値に合致する。ここには問題がない。しかし、「下位相対的大量」という「第二の場合」と「上位相対的大量」という「第三の場合」とにおいては問題がある。

「第二の場合」と「第三の場合」とのいずれにおいても、加重平均的価値としての市場価値と、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値との二通りの市場価値が、抽象的に確定される。時を異にして、競争——市場では需要と供給——は、いずれかの市場価値を実現させる。この点についての、マルクスの叙述をみよう。

「三つの場合」において、「いまこの商品分量が普通の供給量だと仮定して… …、この商品分量にたいする需要もまた普通の需要であるならば、この商品は市場価値[イコール加重平均的価値——東井]どおりに売られる。さきに研究した三つの場合のどれでこの市場価値が規制されようとも、そうである。」(K III 195)

この点について、次のようにも述べられてある。「ある一定の物品の生産に費やされる社会的労働の範囲が、みたされるべき社会的欲望の範囲に合致しており、したがって生産される商品分量が需要が不変なばあいの再生産の普通の規模 (Maßstab) に合致するならば、この商品はその市場価値 [=加重平均的価値——東井] どおりに売られる。」(K III 196)

マルクスが「三つの場合」のいずれにおいても、この商品分量が「普通の供給量」だと仮定し、この商品分量にたいする需要もまた「普通の需要」であるならば、この商品は、加重平均的価値としての市場価値どおりに売られる、と述べ、「これに反して、商品分量がそれにたいする需要よりも大きいかあるいは小さいばあいには、市場価値からの市場価格の背離が生じる。」という。つまり、不変的需要のもとで、再生産される分量が「普通の供給量」よりも大きいかあるいは小さい場合をいっているのである。マルクスはこうしたことは次の二つの原因から生じると言っている。すなわち、「与えられた市場価値 [加重平均的価値としてのそれ——東井] を調整した規模 (Maßstab) とは異なる規模で再生産がおこなわれるようになったばあい。このばあいには、需要が変わらないの

に供給が変わって過剰生産または過少生産が起きたのである。もう一つは、再生産すなわち供給が変わらないが需要が増加または減少したばあい。」(KⅢ195)

「第一の背離」をまず「第二の場合」においてみてみよう。需要が同一不変のもとで、供給量が「普通の供給量」よりも減るばあいか、供給量が変わらないのに、需要が「普通の需要」を越えるばあいには、いずれのばあいにも、市場価格は、加重平均的価値としての市場価値から上昇するであろう。需要が非常に強くて、市場価格が最悪の諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値と一致しても、需要が収縮しないならば、この個別的価値が市場価値を規制することになるであろう。支配的大量商品の個別的価値としての市場価値を実現させた需要と供給との一致は、需給の「異常な組み合わせ」なのである。なぜならば、このばあいの需要は「普通の需要」よりも大きいのか、供給量が「普通の供給量」よりも小さいのである。加重平均的価値としての市場価値を実現させた需給一致のもとでは需要は「普通の需要」であり、供給も「普通の供給」であった。このような需給一致こそ「普通の」または正常な需給一致なのである。

ところで、「一定の商品種類を生産するために費やされる社会的労働の範囲が、この生産物によってみだされるべき社会的欲望の範囲によって過少であるばあいに」支配的大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、加重平均的価値よりも遙かに多量の社会的労働を代表するのである。

「第三の場合」において、需要が不変のもとで、供給が「普通の供給」を越えるか、供給量が不変なのに需要が「普通の需要」以下に減少するならば、市場価格は、与えられた加重平均的価値から背離して下落するであろう。市場価格が下落すれば、需要が増えるであろう。したがって、最良の諸条件のもとで生産されている支配的大量商品の個別的価値にまで市場価格が下落するためには、市場価格の下落に伴う需要の増によって相殺されないほど、供給が非常に大きくなければならない。マルクスは言う、「最良の諸条件のもとで生産される諸商品のこの個別的価値と市場価値とを一致することは、供給が非常に大き

越える場合のほかには、ありえない。」(「不明瞭な」Ⅲの箇所)

市場価格が支配的大量商品の個別的価値に一致すると、需要と供給は一致する。しかし、この需給一致は、需要が「普通の需要」よりも小さいか、供給が「普通の供給」よりも大きすぎるような需要と供給との結合と言わざるをえない。この需給一致もまた、需給の「異常な組み合わせ」なのである。そしてこの場合には、この商品量の市場価値は、加重平均的価値が含むよりも「遙かに少量の社会的労働を代表する。」(KⅢ198)

以上で、需給の「異常な組み合わせ」に焦点をあてて、「第一の背離」を考察したのである。このようにして、競争は、需給の「異常な組み合わせ」という形で、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値を実現させるのであるが、「需要と生産物量との差がもっと大きければ、」市場価格は、この市場価値から上(「第二の場合」)または下(「第三の場合」)に、「もっと大きく背離するであろう。」(KⅢ195) 第二の背離が生じるのである。

こうみてくると、「不明瞭な箇所」は、競争——市場では需要供給関係——を通しての市場価値の実現を説いていることがわかるのである。

IV 結 語

マルクスは、「厳密に言えば」で、加重平均的価値としての市場価値を与えている。「中位相対的大量」という「第一の場合」においてはもちろんのこと、「下位相対的大量」という「第二の場合」においても、「上位相対的大量」という「第三の場合」においてもそうである。

市場価値のかかる抽象的な確定は、一定の社会的欲望が前提とされるならば、売り手たちの競争によってなされる。マルクスは述べている、同一市場にある同種の諸商品、「といっても個別的な色彩を異にする事情のもとで生産されている諸商品の市場価格が市場価値と一致して、それよりも上がることも下がることによっても市場価値からかたよらないためには、いろいろな売り手が互いに加え合う圧力が十分に大きくて、社会的欲望の要求する分量の商

品、すなわち社会が市場価値を支払うことのできる商品分量を市場に出させることが必要である。」(KⅢ190) この側面からすれば、加重平均的価値としての市場価値の確定には売り手たちの競争による生産諸条件の組み合わせが関与しているのである。他面、抽象的に確定される市場価値を現実の市場で実現させるのは、買い手たちのあいだの競争——市場では需要——なのである。

マルクスは、「現実の市場では、買い手たちのあいだの競争によって媒介される」と説き、「この商品分量が普通の供給量だと仮定し／この商品分量にたいする需要もまた普通の分量であるならば、」商品は、加重平均的価値としての市場価値で売られる、と説いている。言い換えれば、競争——市場では需給関係——が加重平均的価値としての市場価値を成立させるのである。この点に関して、マルクスは、次のようにも述べている。

「ある商品がその市場価値[加重平均的価値としてのそれ——東井]で売られるためには、すなわちそのなかにふくまれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量に使用される社会的労働の総量が、その商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力ある社会的欲望の量に対応していなければならない。競争は、つまり需要供給の比率の変動に対応する市場価格の変動は、各商品種類の総量に使用される労働の総量を、たえずこの限度に引きもどそうとするのである。」(KⅢ202)

また、この商品が加重平均的価値としての市場価値どおりに売られるばあいには、「三つの場合」のいずれにおいても、「ある一定の物品の生産に費やされる社会的労働の範囲が、みたされるべき社会的欲望の範囲に適合しており、したがって生産される商品分量が需要が不変なばあいの再生産の普通の規模に適合している」ことになる。この場合の需要と供給との一致が、需給の「普通の組み合わせ」であろう。つまり、「社会的労働の範囲」と「みたされるべき社会的欲望の範囲」との合致を、需給の「普通の」組み合わせと、マルクスが見なしたものと考えられる。前者が「普通の供給」であり、後者が「普通の需要」である。マルクスは、このような需要と供給との一致から出発して、「第

一の背離」を説いているのである。

「第一の場合」においては、「この商品量の市場価値または社会的価値——この商品量に必然的にふくまれている労働時間——は、中位の大量の価値によって規定されているのである。」(K III 292) この規定を可能とするのは、競争である。「商品の供給が、普通の需要をみたすばあいには」、中位の大量の商品の個別的価値が市場価値を規定するのである。この市場価値は、一面では「諸商品の平均的価値」であり、他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産され、生産物の大量をなしている諸商品の「個別的価値」でもある。この「平均価値」と「個別的価値」とは一致しているのである。

この場合において、商品が市場価値どおりに売られる場合には、この商品量が「普通の供給量」であり、需要もまた「普通の需要」である。これが需給の「普通の」組み合わせと解されうる。

「第二の場合」には、「悪い方の諸条件のもとで生産される商品量が、市場価値または社会的価値を規制する。」「第三の場合」には、「最良の諸条件のもとで生産される部分が市場価値を規制する。」このような規定が可能となるのは、「ただ異常な組み合わせのもとでのみ」である。換言すれば、「第二の場合」において、最悪の諸条件のもとで生産されて支配的少量をなす商品の個別的価値が市場価値を規制するということが可能となるのは、「需要が普通の需要を越えるばあいか、あるいは供給が普通の供給よりも減るばあいだけである。」「第三の場合」においては、最良の諸条件のもとで生産される支配的少量商品の個別的価値による市場価値の規制を可能とするのは、需要が不変のもとで再生産される商品の供給量が「普通の供給量」よりも大きすぎるか、供給が変わらないのに需要が「普通の需要」よりも小さくなるかするばあいだけである。

市場価値に関する最悪規定また最良規定が可能となるばあいにも、需要と供給とは一致しているのである。しかし、この需給一致では、需要が「普通の需要」でないか、供給が「普通の供給」でないのである。換言すれば、「ある一

定の物品の生産に費やされる社会的労働の範囲」と「みたされるべき社会的欲望の範囲」とは合致していないのである。このような需給一致は、まさしく、需給の「異常な組み合わせ」といわざるをえないのである。

このようにみえてくると、市場価値に関する支配的大量規定を可能とするのは、生産諸条件の組み合わせではなくして、競争——市場では需要供給関係——なのである。次のマルクスの言葉からこの点がよく理解されよう。

「需要と供給が市場価格を調整するとすれば、またむしろ市場価値からの市場価格の背離を調整するとすれば、他方では、市場価値が需要供給の関係を、または需要供給の変動が市場価格を振動させる中心を、調整するのである。」（K III 190）

最後に論点を整理しておこう。同一市場における同種の諸商品が、加重平均的価値としての市場価値どおりに売られるばあいには市場価格が市場価値に一致し、需要と供給とは一致している。この商品量の生産に必要な社会的労働と、この商品量でみたされるべき社会的欲望とが一致している。一方、諸商品が支配的大量商品の個別的価値としての市場価値で売られるばあいにも、市場価格は市場価値に一致し、需要と供給とは一致している。

かように、加重平均的価値としての市場価値での需給一致と、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値での需給一致との二通りの需要と供給との一致がみられる。「第一の場合」には、この二通りの一致は、分裂することなく一つに解消されている。これに反して、「第二の場合」と「第三の場合」とのいずれにおいても、二つの需給一致が、時を異にして存在することになる。そこで、需要と供給との一致が意味するところが問題となる。マルクスは、加重平均価値として諸商品が売られるばあいの需給一致を、出発点として、価値法則から合理的な自然法則と考え、これを「普通の」需給一致と見なしたと思われる。

「第二の場合」と「第三の場合」におけるように、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値で諸商品が売れるばあいにおいて需要と供給とは一致し

ているのだが、しかしこのばあいには需要が「普通の需要」から背離しているか、供給が「普通の供給」から背離しているのである。したがって、「需要の側にある大きさの一定の社会的欲望があって、それをみたすためにある物品の一定量が市場にあるということが必要であるようにみえる。しかし、この欲望の固定性は仮象である。」(KⅢ198)「第二の場合」と「第三の場合」とにおけるように、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値で、全商品量が売れるばあいでの、需要と供給との一致のもとでは、この全商品量の生産に必要な社会的労働の範囲がみたされるべき社会的欲望の範囲に適合していないのである。なぜならば、このばあいの需要と供給との一致が意味していることは、需要が「普通の需要」でないか、供給が「普通の供給」でないということである。したがって、マルクスは、支配的大量商品の個別的価値としての市場価値で商品量が売られるばあいの需要と供給との一致を、加重平均的価値としての市場価値どおりに売られる「普通の」需給一致と区別して、需給の「異常な組み合わせ」と名づけたものと考えられる。「異常な組み合わせ」とは、需給の「異常な組み合わせ」にほかならないのである。市場価値の成立に関する叙述は、価値法則を前提としての、きわめて競争論的なものといわざるをえないのである。